

二、木地師アーカイブ・プロジェクト

(一) プロジェクトがはじまる

東近江市では、平成二九年から「木地師のふるさと発信事業」を立ち上げました。東近江市と全国の木地師との交流を深めるために情報を発信するという事業で、市民に対しても木地師のことを知ってほしいという意図もありました。

この事業の一環として「木地師のふるさとアーカイブ・プロジェクト」と称する作業が始まるのが平成三〇(二〇一八)年一〇月で、この事業は六年間続きました。全国の木地師が製作し、東近江市で保管している木地関係の資料を再整理して、その貴重な資料を市民の皆さんをはじめとして、全国の多くの人々に知ってほしいというのがこのプロジェクトの主要な目的でした。

約六年間に行った作業として、能登川博物館と旧湖東歴史民俗資料館で保管されている漆器と木地に関する資料、そして東近江市和南町の中島家資料、蛭谷町の資料の一部を整理することが主要な作業になりました。

このうち能登川博物館保管資料がもっとも多く、作業終了時点で対象資料一〇二〇件、二二六〇点のうち、二二六〇点の台帳作りを行いました。このうち九九〇点が今回の報告の対象になりました。

旧湖東歴史民俗資料館の保管資料は民俗関係資料全般と書籍が多くを占めていました。よって数人の関係者が漆器や木製品を中心に選定した結果、その数は二六二点になりました。

また中島家資料は土蔵を取り壊す計画があつて、漆器類を中心に主要な収蔵品を見せていただくことになりました。その数は一一七点を数えました。資料の多くは杉板製の箱に入っており、膳碗等同種のもものがセツトで保管されていました。

一般にこの種の作業は資料の写真を撮り、寸法を測り、台帳を作ることを基本にします。人間に戸籍があるように、収蔵資料にも戸籍を作ることで資料の存在を明確にし、資料の整理や収蔵、展示作業を速やかに

行うことができるからです。

本報告は木地や漆器資料を整理・保管していることの重要性を知るために、そして数百年もの長い間、日本各地で木地や漆器を製作してきた人々が、日本の食器文化を支える大きな力になってきたことを知る機会になると考え作業を行いました。

(二) 資料の全体像を明らかにするために

この度報告書を編集するにあたり、収蔵資料を体系的にみていくために、また資料の内容を理解するために、まずは全体像を明らかにする必要があると考えました。加えて、いかにして資料の存在や意味をわかりやすく表現できるか、ということが大きな課題になりました。

多様な内容を含んだ資料を体系的に整理し、全体像を明らかにする方法として分類という方法があります。分類することの意味は、資料を等級別に分け(ランク付け)、資料の属性を秩序づけていくことで、大きな塊としてもを理解しやすくするといわれています。

当初はどのような形で分類ができるかにこだわっていましたが、逆に分類することにより、生活者の微妙な感覚がそがれてしまう可能性があるという考えに至り、別の方法をとることにしました。

まず、この報告書作成の大きなテーマとして「日本各地で活動してきた木地師が果たした歴史的役割」としました。能登川博物館の資料を整理していく中で、木地師が製作してきた製品は多様な分野に及んでいることが明らかになってきたこと、その製品が流通し、多くの人々が用いることで、人々の暮らしが豊かになっていったことが浮かび上がってきたからです。そこで具体的な目標として、人々の暮らしを基本においてどのようなときに木地製品や漆器類を役立てていたのか、という問題に焦点をあてました。

分類が適さなかったもう一つの理由は、能登川博物館、旧湖東歴史民俗資料館、中島家という三箇所保管されていた資料が主要な対象であり、しかも資料の性格が異なっていたことでした。具体的なことはそれぞれの章の冒頭で述べることにします。

(三)「暮らす」と「作る」の両輪

三箇所の収蔵資料の特徴を前程にして、いかに資料の全体像を明らかにしていくかその基本的な考え方を固めていくことにしました。

その結果、数度のブラッシュアップを経て「暮らす」「作る」という大きな二つのグループに分け、そのうち地域共同体と血縁関係を重んじた暮らしをより豊かにしてきたと考え、その文言として

「祝う／弔う／信ずる」

「食を楽しむ／もてなす」

「酒を楽しむ」

「茶を楽しむ」

「調理する」

「遊ぶ／飾る／くつろぐ」

「近代化を支える」

ということに落ち着きました。「このうち」近代化を支える「は、人々の暮らし方とは直接の関係性が薄いことがわかります。そこで、独立した項目を立てる必要があるのですが、今回はとりあえず生活関係の項目に加えました。

もう一方の「作る」は、製品を製作し提供してきた木地師と塗師の側の問題になります。もの作りには木地師、漆かき職人及び塗師の技術と工具が欠かせないものであり、ものができるまでの製作工程を中心に構成しました。人々が必要としてきた生活用具は、使用する側が主役になります。東近江市の収蔵資料を基に以下のように表現しました。

「原木を伐採する」

「木地を作る」

「木地を挽く」

「漆を塗る」

木地椀の製作は工具とその加工・補修を含めて工具の保守管理、また塗師においても同様に漆塗りに関する用具を大切にしています。また製作工程に関しては素人にはわからない奥の深い技術が潜んでおり、それ

を理解し報告書に記載することは至難の業です。しかしながら不十分ではありますが、製品を生み出していくために必要な要素を極力盛り込む試みをしました。この一連の作業によって木地物と漆器を使う側と作る側の姿勢を理解することにつながったのではないかと考えています。

この一連の作業の中で、能登川博物館の資料は単品で資料化することが可能でしたが、旧湖東歴史民俗資料館と中島家の資料は、たとえば本膳(飯椀、吸物椀、平椀、壺椀、皿)というように、膳と漆器の組合せを切り離すことが難しく、さらにそれぞれの膳椀類は木箱に入れて保管されているため、単品で資料化することに強い抵抗感がありました。

また能登川博物館の資料は設定した項目の全般にわたっているのに対して、他の二例は「祝う／弔う／信ずる」「食を楽しむ／もてなす」に集中しています。それは磁器の進出により、漆器が儀礼用に限られて使用されるようになった明治以降にみられる現象を見事に表しているように思えます。自然科学分野で行われる正確な分類はできていませんが、副産物として別の形で発見するものがあったことは大きな収穫でした。

(文責:須藤 護)